

湘南遺産アーカイブ 2 (湘南の由来編)

2020,10,20版 文責:和田精二

■「湘南」の由来に関わる記述事例

出典	引用
<p>湘南の由来 1 「湘南伊豆文学散歩」 野田宇太郎</p>	<p>■三浦半島と伊豆半島を両端として、その間にゆるやかに弯曲する相模湾の渚沿ひの湘南に、私のかりそめの旅は始まる。</p> <p>湘南とは中国の「瀟湘湖南」からとった称呼だと云ふ。中国の湖南省洞庭湖の南にあるのが瀟水と湖水(湘江)である。湘江は遠く江西省北部の海陽山に源を發し、途中、湖南省寧遠県の九疑山から發した瀟水を合して、洞庭湖に注ぐ風光明媚の地帯である。</p> <p>しかし私はその風光を探らうとするのではもちろんない。主として明治以降の文学を中心に、その地に点々と秘められた先人たちの生々しい足跡に手をふれ心を触れて、未来への言い伝えにしようとするのである。しかし、その地に住み或ひは死んだ文人たちも、やはり三浦半島や湘南や伊豆の自然風土を愛し、或ひは恋ひ求めていった人々であったのは文藝史の広い視野からも、逸することができないことである。</p> <p>★「湘南伊豆文学散歩」野田宇太郎、英宝社、初版:昭和 30 年 12 月 10 日</p> <p>★野田宇太郎:1909 年生まれ。詩人・文藝評論家。</p>
<p>湘南の由来 2 「湘南の文学めぐり」高瀬慎吾</p>	<p>■「サガミ」という呼称に、なにびとかが、相(シャウ・サウ)、模(ボ・モ)の字をあてたのでやがてこれが「相州」となり、「相陽」となり、あるいは「相中紀行」などと、広くもちいられるようになり、ついでに「湘陽」「湘南」と飛躍して来たのである。「相」を「湘」と書きはじめたのは、鎌倉時代にさかのぼり得るかも知れないが、はっきり指摘することが出来ない。いまわたくしは、わたしの管見による一それも江戸時代の一、2のことを、以下にのせて見たい。</p> <p>黄檗宗が、日本へ渡ってきたのは承応3年(1654)で、隠元隆琦(1592-1673)はじめ 2 名が来朝した。この僧たちはすべて中国に生まれ、中国で育ち、かつ修行大成した禅僧たちで、この木庵が箱根と小田原の中程、北側に位置する入生田の長興山紹太寺に来たときに作ったという境内八景の詩がある。そのひとつに「湘江雪浪」というのがある。(詩は略) この詩で木庵は、相模湾一帯の海浜を指して「湘江」とよび、10 里の長浜に舞う白雪の姿に感銘している。</p> <p>中国の地図を開いてみると、揚子江の源流をなす地域に、相模国の倍ほどもある洞庭湖がある。この洞庭湖を北にもつ平原を「湖南」と呼ぶのである。ここで広西省の陽海山に発して北</p>

	<p>流する「湘水(湘川)」が、瀟水に合して悠々と洞庭湖にそそぐのである。その河水は清く澄んでいて、よく十尋の底を見ることができると言われ、沿岸の風景は変化に富み、絶景八処が撰られ、古来これを蕭湘八景と言っている。</p> <p>また、<u>登山の妙境、衡山のあたりを「湘南」と呼んでいる。碧巖録という中国の禪書の第18則によると、耽源という僧が、唐の皇帝肅宗の問いに対して、むぞうさに「湘之南、瓢之北」と、含蓄ある言葉をもって応答している。湘南・瓢北は言うまでもなく、湘水に沿った都邑、湘潭のあたりにちなむ勝境の雅語である。相模国の「相」を「湘」に、さらに「湘南」と美化粧したものは、大陸の名勝「蕭湘」や「湘南」による詩文などから、かの地に憧憬をもった学僧たち、ないしは、鎌倉時代からあいついで来朝した渡来僧などに、始まったのではあるまいか。</u></p> <p>鉄牛道機(1629-1700)は、俗姓藤原氏、はじめは、京都の妙心寺で臨済の学風を修したが、のち、隠元隆琦に参じて黄檗宗に入り、木庵性瑫の印可を得たと伝えている。長興山紹太寺は小田原藩主稲葉侯の請に応じて、鉄牛が開創した寺である。この鉄牛が、相州高座郡国分村(現在海老名町国分)の瑞雲山竜峯寺で作った、境内八景詩のひとつに、次の一絶がある。(詩は省略)鉄牛は、相模川を「湘川」といい、また「湘浦」といい、相模川の渡船を灑灑(中国四川省の河)の嶮に比している。このほか、相模の詩文によると、「湘東」「湘水」「湘岳」「湘峡」等の文字に出会う。「湘岳・湘峡」は相模国霊山大山を言い、「湘水」は「湘水ノ浜」と書いて相州の海辺を云い、「湘東」は鎌倉およびその付近の地をいっている。</p> <p><u>大磯町の鳴立庵へ行くと、「鳴立沢」の古石標をみる。高さ1,5mほどの自然石である。その裏面には、建立者崇雪の名のほかに「看尽湘南清絶地」の7字の刻銘がある。崇雪は、小田原宿の旧家外郎(ういろう)家の族といい、鳴立沢に茅舎を建てて住みついた最初の人と伝えている。鳴立沢の後丘にならんでいる石造五智如来の台座には「寛文四甲辰天十一月吉日。建立者狐峯崇雪」の銘が残っている。これによると、崇雪は寛文4年(1664)の頃ここに栖止していた人物であることが分かる。かれは、この自然のすばらしさに、「看尽す湘南清絶の地」と、詩学大成の一句を思い出して刻銘したのである。この刻銘は、「湘南」の2字を載せた碑碣として、湘南地方最古のもののように思われる。</u></p> <p>★「湘南の文学めぐり」湘南紀行文学会同人 1968(昭和43年)、p16-18</p> <p>注1)高瀬慎吾氏は、平塚の郷土史家で平塚市・厚木市文化財保護委員を務めたほか、「湘南の文学めぐり」等の著作がある。故人。</p>
<p>湘南の由来3 「湘南物語Ⅰ」 湯山学 ★小田原の紹太寺と禅僧に言及した珍しい例</p>	<p>■『しかし「湘南」ということばをあらたまって考えてみると、その性格の漠然としていること、その呼ばれている地域の不明確なことに驚かざるを得ない。(略)そこでこのシリーズのはじめは地方がいつから「湘南」といわれるようになったか、また「湘南」といわれる理由からはじめてみよう。幸いこのことについては、「郷土の文学散歩」シリーズのⅡとして、湘南紀行文学会同人が編んだ「湘南の文学めぐり」と題する冊子のなかで、郷土史家の高瀬慎吾氏が「湘南について」という題名でまとめておられるのでそれを紹介しよう。(注:「郷土の文学散歩」シリーズⅡは現在大磯町立図書館が所蔵)</p> <p>◆『「湘南」の「湘」は「相」の雅称ということが適当であろう。この地方には「湘南」と並んで、相模川・相模湾・相模鉄道などという、「相模」の名のついた地名や施設が多い。これは神奈川県のうち、横浜(旧戸塚区を除く)・川崎の両市を除いた全地域が、近世まで相模国と称していたことによる。いわゆる日本全国を60余州といったところの名勝である。先の横浜・川崎のあたりは、武蔵国に属し、武州と通称され、相模国は相州と略称されていた。相(シャウ・サウ)州が「相陽」となり「相中紀行」などともちいられ、ついでに「相陽」「湘南」と飛躍してきたという。この「湘南」ということばが記録として残るもっとも古いものは、江戸時代の初めのころ、寛文4年(1664)に、小田原の旧家外郎(ウイロウ)家の1族である崇雪なる俳人が、西行法師の旧跡として有名な大磯の鳴立沢に「鳴立沢」という古石標を建てたその裏面に、「看尽湘南清絶地(注1)」と刻んだのがそれである。</p> <p>江戸時代の相模に関する詩文には、「湘東」「湘水」「湘岳」「湘峡」「湘川」などという言葉が多く使われている。「湘東」は鎌倉付近をいい、「湘水」は「湘水ノ浜」と書いて相州の海浜をいい、「湘岳」「湘峡」は霊峯大山を指し「湘川」は相模川のことである。こうした詩文を主につくったのは禅僧であるが、そのうちの1人の鉄牛道機は、海老名町国分の竜峯寺で作った境</p>

	<p>内八景詩に、相模川を「湘川」といい、また「湘浦」といって相模川の渡船を灑瀨（中国四川省）の嶮に比している。</p> <p>このころの同じく禅僧である木庵性瑫（中国渡来僧）が、小田原の箱根湯本に近い入生田にある紹太寺で詠んだ境内八景詩に、相模湾一帯の海浜を「湘江」とよんでいる。これらの禅僧の修養の背後には中国の南画の背景となった中国南部の風景がある。禅宗の故郷は中国南部であるが、その地方に毛沢東が旗揚げしたことで有名な「湖南」省という地方がある。ここには相模国の倍ほどもある洞庭湖と呼ばれる大きな湖があって、その湖の南の平原を「湘南」といったことから名付けられた。この湖に「湘川」（湘水）が蕭川に合してそそぎ、沿岸の風景は変化に富み、いまも新中国では有名な遊樂地となっている。中国の禅僧は好んでこの風景を、絶景八処などと呼んで、古来蕭湘八景と題して詩文に読み、とくに登仙の妙境衡山あたりを「湘南」と呼んだ。「相」を「湘」に、さらに「湘南」と美称化したのは、大陸の名勝「蕭湘」や「湘南」による詩文などから、かの地にあこがれをもったこれら学僧たちで、鎌倉時代から渡来した僧にはじまったという。』</p> <p>★「湘南物語Ⅰ」湯山学、1987（昭和62年）、p9-11</p>
<p>湘南の由来4 「湘南雑記」 本田一壽</p>	<p>■現在、湘南という名称は有名だが、その名称の謂を知っている人は意外と少ないと思う。そこでその謂を「広辞苑」で引いてみると、①中国湖南省の洞庭湖に注ぐ湘江の南方一帯の景勝地の称、②（相模国南部「相南」を、①に因んで書く）相模湾沿岸地帯の称。葉山・逗子・鎌倉・茅ヶ崎・大磯などを含む。夏季は海水浴場多く、冬季は比較的温暖で京浜の避寒地。住宅地化が進む。このように記載されている。</p> <p>そこで①にまつわる伝説を中国の「史記」「五帝本紀」や、神話と地理書ともいわれる「山海経」、あるいは「詩経」と並んで中国古代の二大詩集ともいわれる「楚辞」「九歌」などから拾うと次のように出てくる。中国五帝堯（ぎょう）の時代、舜（しゅん）は20歳のとき、すでに親孝行で評判が高かった。30歳のとき皇帝堯に登用され、堯が帝位について70年目の年、舜が50歳のとき、堯から摂政を命じられた。舜が58歳のときに堯は崩御した。舜は3年の喪に服してから堯に代わり帝位についた。61歳のときであった。即位後18年のときである。</p> <p>舜は南方へ巡察に出かけた。その途中、蒼梧（そうご）の野まで来たとき舜は死亡し、江南の九疑山（きゅうぎざん）に葬られた。その地のことを「史記」に、そこが零陵（れいりょう）であると記載されている。舜が蒼梧で崩じたことを知った舜の2人の妻、娥皇（がこう）と女英（じょえい）は舜の後を追ひ湖水のほとりまで来たとき、悲嘆のあげく湖水に身を投じて水死した。娥皇は堯の長女であり女英は二女とともに舜に嫁していた。水死した娥皇は湘君（しょうくん）女英は湘夫人と呼ばれ、湖水の神になったという。屈原の「楚辞」「九歌」のなかに「湘君」「湘夫人」の2編がある。ともに彼女たちを慕い呼びかけている歌なのだ。</p> <p>屈原は楚の王族に生まれ、王の側近として活躍したが、妬まれて失脚し、湘江の辺を彷徨った果てに、湘江に注ぐ汨羅江（べきらこう）に投身した人である。時代は下り、盛唐の李白が一族のおじである李曄（りよう）と左遷されていた賈至（かし）との2人に同行して、洞庭湖に舟を浮かべて遊んだときに作ったのが、次の詩である。族叔刑部侍郎曄及び中書賈舎人至に陪して洞庭に遊ぶ 洞庭西に望めば楚江分かる 水尽きて南天雲を見ず 日落ちて長沙秋色遠し 知らず何れの処にか湖君遠し 知らず何れの処にか湘君を弔う</p> <p>またこのとき、賈至が詠んだのが次の詩なのだ。初めて巴陵に至り李十二白を洞庭湖に泛ぶ 楓岸紛々として落葉多く 洞庭の秋水晩来波だつ 興に乗じて輕舟近遠無く 白雲名月湘娥を弔う ともに七言絶句で、伝説の洞庭湖の女神を弔い詠ったのである。それほどまでに洞庭湖畔は、特に蕭湘八景は美しい所といわれている。我が国の金沢八景や近江八景はこれにならってつけた地といわれている。</p> <p>★「湘南雑記」本田一壽、新風舎、2006、p13-16</p>
<p>湘南の由来5</p>	<p>■国鉄は「湘南電車」を走らせ、文部省は「県立湘南高校」を抱えているが、「湘南」はあくまで感覚的な空間領域なのだ。では、「湘南」の語源はなにか？ 吉井勇の恋歌を紹介したい。</p>

<p>「湘南の50年」草柳大蔵 ★徳富蘇峰の前に富岡畦草の存在あり!</p>	<p>「君がため蕭湘湖南(しょうしょうこなん)の乙女らはわれと遊ばずなりにけるかな」この1首は吉井勇の処女歌集「酒ほがひ」の中に収められている。野田宇太郎は「湘南文学散歩」を書くにあたって、目ざとこの1首を拾いあげている。「相模湾に面する鎌倉や逗子の海岸は湘南と呼ばれている。湘南は、蕭湘湖南の略称である。蕭湘湖南は説明するまでもなく、中国湖南省の風光明媚な地帯として古くから知られた瀟水や湘江のある地方の総称だが、これを芦ノ湖のある箱根以南の海岸にもって来て、得意になったのは、どうやら近世の漢学者などの文人趣味であつたらしい。</p> <p>それでも戦後になって江の島あたりにマイアミが生まれ、大磯にロングビーチが生まれたのとは違って、いささか文化らしいものが湘南という呼称には感じられもする。(略)「湘南」を誕生させた「近世の漢学者」は誰であつたか?これが分からない。富岡畦草の「湘南の散歩みち」の冒頭はこうなっている。「日清戦争後、中国に旅した明治の文化人は、湖南省洞庭湖とこれに注ぐ「湘河」の美に打たれて帰国すると、彼らの好んだ相模南部の風景に「湘南」の名を献じた。その後、湘南の美称は、徳富蘆花の「自然と人生」などの文芸作品によっても広められた。</p> <p>富岡畦草も、やはり「明治の文化人」にとどまっている。この名づけ親の名前が分かれば面白いとは思いますが、やや好ま家的な趣味に偏しているようにも思われる。だいたい、「何処から何処までが湘南」という空間領域がハッキリしていないのだから、瀟水や湘江のイメージそのものが主人公ということになるだろう。</p> <p>富岡畦草は「湘南の散歩みち」で横浜の三溪園から湯河原までの海岸線を取り上げているし、野田宇太郎は「箱根以南の海岸」というような表現の仕方である。要するに、<u>相模湾に沿った地帯であつて、三浦半島のつけ根から湯河原までがスッポリ入っている、とすることが適当のようだ。</u></p> <p>★「湘南の50年-湘南を築きあげた先駆者たち」知性社編/ばら出版/1977(昭和52)/巻頭言・草柳大蔵・p10~12</p>
<p>湘南の由来6-1 「湘南の風景」 小風秀雅</p>	<p>■湘南とは不思議な地名である。相模国の南を意味する「相南」から来るという説もあるが、僧侶や漢詩人が号に使用したり、京都西芳寺の茶室に「湘南亭」(重要文化財)があることなどから見て、日本の歴史に淵源を持たず、「瀟湘(しょうしょう)八景」で有名な中国湖南省の洞庭湖に注ぐ「湘水」という川の風光明媚な南の地域を指す「湘南」にちなむ地名と考える方が自然であるように思われる。箱根を中国の函谷関になぞらえて函嶺と言ひ、函嶺湘南と並び称されたことなど、「東洋のマイアミ」ならぬ「日本の湘南」というところであろうか。しかし、風光明媚を表す雅称である湘南が中国になぞらえた地名ならば日本全国に存在してもよいはずであるが(地名を冠した近江八景などは全国に存在する)、相模湾沿岸の地域を指す名称として一般に広がり、社会的に定着するようになって来たのは、いつ頃のことだったのであろうか。</p> <p>近世以前から使用事例があることはよく知られているが、地域名称としては必ずしも一般的ではない。1889(明治22)年に、愛甲郡に湘南村(小倉村と葉山島村が合併、1955(昭和30)年城山町に合併、現在の相模原市)が誕生しており、新聞などで使用され始めるのもこの頃であるが、必ずしも地域名称としては定着していないし、湘南イメージを必ずしも伴ってはいなかった。しかし、それから25年後の1915(大正4)年に刊行された「湘南遊行記」には、現在の湘南地域に関して、次のように記されている。『湘南といふの漢として広く且つ直ぐと勝景の地を連想せしむるかの気分がする湘南の名は、直ぐと人の遊心を唆る。同時に人をして雲水行旅の身となさずには措かん。其地に秀れた自然の美があり気候風土の天恵があり、思出多い史蹟の豊富なるものあるからであらう。』自然の美、天恵の気候風土、豊富な史蹟に恵まれた遊び心をそそる地、勝景の地、という湘南イメージが、すでに大正初期には成立していたのである。★「茅ヶ崎市史ブックレット11・湘南の風景」小風秀雅、H21、p2-3</p>
<p>湘南の由来6-2 「湘南の誕生」</p>	<p>■湘南の由来には、大きくわけて、相模国の南の地域、を意味する相南という言葉にさんずいがついて湘南になったという説と、中国湖南省の洞庭湖に注ぐ川に「湘水」があり、その南の風光明媚な地域を指す「湘南」にちなんだという説がある。また洞庭湖に注ぐ瀟水と湘水の2つの川が合流するあたりの絶景を「瀟湘(しょうしょう)八景」といい、金沢八景などの名勝の原型であるが、江戸初期の沢庵和尚が江の島の風景を「瀟湘」に譬えたと伝えられている。いわば文人趣味の世界に現れた名称であり、雅号としての使用例は、中世の禅僧の湘南涼沓や明治</p>

小風秀雅	の漢詩人大久保湘南などにもみられるが、これが地域名として使用され、箱根を函谷関に比定すると同様に、「東洋のマイアミ」ならぬ「日本の湘南として相模湾沿岸を呼んだというのである。★「湘南の誕生」(小風秀雅)藤沢市教育委員会, 2005,p1、
湘南の由来7 「湘南別荘物語」島本千也	<p>■『「湘南」とはどの地域をさすのであろうか。平成 8 年 4 月、大磯町は鳴立沢のそばに「湘南発祥の地大磯」の石碑を建てた。その説明版には次のように書かれている。『湘南発祥の地大磯の由来、崇雪という人が寛文4年(1664)頃西行法師の詠んだ名歌「ころなき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ」を慕って草庵を「ここに結び標石をたて、東海道を往還する旅人に鳴立沢を示し「著盡湘南清絶地」と景勝を讃えて刻んだのがはじめてです。中国湖南省にある洞庭湖のほとり湘江の南側を湘南といい、大磯がこの地に似ているところから湘南と呼ばれるようになりました。』「湘南発祥の地が大磯であることの宣言である。</p> <p>大磯町は「湘南」の語の多用とその範囲のあいまいさに不安を感じたのであろうか、石碑に隣接する鳴立庵のなかには「鳴立沢」の石碑があり、その裏面に「著盡湘南清絶地」(明らかに湘南は清絶をつくすの地)と刻まれた碑が残っている。それが「湘南」の語のもっとも古い用例とされている。』</p> <p>★「湘南別荘物語・海浜の憩い」島本千也,2000,p39</p>
湘南の由来8 「湘南再発見」 吉田克彦 ★川のイメージ	<p>■では「湘水」はと申しますと大修館・大漢和辞典に寄れば「(略)」、そして「湘南」はと見てみますと「湘水の南」となっています。そうだとしますと、<u>もともと「湘南」は海のイメージよりも河のイメージの方がなじむように思われます</u>。しかしまあ海にしても河にしても水辺の風景という点では共通しているわけですから余り詮索しても意味のないことかも知れません。</p> <p>幸か不幸か津久井郡の湘南村は昭和 30 年に川尻村や三沢村の一部と合併して城山町となりましたので現在は現存しませんが、明治 39 年に出来た湘南小学校は現存しているとのこととです。ここで注目されますのは湘南村が出来たのが明治 22 年だということです。これは徳富蘆花が湘南雑筆を書いた時期より 10 年も前のこととなります。「湘南」を海と結びつけたのは若しかすると徳富蘆花の大きな功績?だったのではないのでしょうか。</p> <p>★「湘南再発見」吉田克彦・江ノ電沿線新聞社・1996(H8),p201-202</p>
湘南の由来9 目でみる藤沢の歴史・藤沢文庫刊行会★日清戦争後という新説	<p>■湘南とは、相模の南部を意味する「相南」だとか、<u>日清戦争後に中国を旅した明治の文化人が、湖南省洞庭湖とこれに注ぐ湘河の美しさに魅せられ帰国すると、ここ相模南部の景勝の地</u>に、湘南の名をつけたのだとかいわれている。とりわけ徳富蘆花の「自然と人生」は、湘南という地名を全国的なものとした。</p> <p>また湘南の名称は、江戸時代の初めのころすでに使用されていたようで、大磯鳴立沢の「鳴立沢の碑」にも刻まれている。今、相模国を区分すると次のようになる。(略)湘南地域は、一般には三浦半島の西岸から伊豆半島の根元あたりにおよぶ海岸地帯をいう。相模湾にのぞむ鎌倉から小田原に至る間の、ゆるやかな弧状をえがく大砂丘地帯である。藤沢・茅ヶ崎は、この砂丘地帯の東部を占めるもので、相模野台地の南辺で、古くから東海道の交通路となり、鎌倉時代の「東関紀行」のなかには、箱根の湯本、大磯、江の島、もろこしが原、鎌倉といった海岸の道程となっている。</p> <p>★「目でみる藤沢の歴史」藤沢文庫刊行会、名著出版、p203-204</p>
湘南の由来10 「神奈川 県民も知らない地名の謎」、日本地	<p>■サーフィンや海水浴、グルメなどでたびたび取り上げられる「湘南」地域。この湘南という名称が指す地域に決まった範囲がなく、漠然としているのが実情である。「湘南」という名称の由来には、「相模国の南の地域」を意味する「相南」が「湘南」に転じたとする説や、洞庭湖(中国・湖南省)に注ぐ川(湘水)の南にある風光明媚な地域(湘南)にちなむという説があるが、どれも確証があるわけではなし。文献に現れるものでもっとも古いのは、1664(寛文 4 年)建立の碑(大磯町)に刻まれた「著盡湘南清絶地」(大磯鳴立庵の崇雪による)という揮毫であるとされ、湘南という名称が固有の地名となったのは 1889(明治 22)年に誕生した津久井郡湘南村(現在の相模原市城山町)が最初であるとされる。湘南という名称が世間に広く知られる</p>

<p>名の会</p>	<p>ようになったのは明治以降のことで、国木田独歩や北原白秋などの文士がそこを訪れ、作品で取り上げたことが大きく影響したようである。</p> <p>★「神奈川県 県民も知らない地名の謎」、日本地名の会、PHP 文庫、2013、P176</p>
<p>湘南の由来 1 -1 「湘南の逆襲」 三觜貴義1</p>	<p>■「湘南」の名の由来については、いずれの辞典（「日本大百科全書」「角川日本地名大辞典」「日本地名大辞典」）も、相模国南部の意味で「相南」、その「相南」が風光明媚な中国の湘江の南岸を連想させるとして「湘南」といいかえたということと一致している。明治 30 年、東京から返子に移り住んだ徳富蘆花が、明治 33 年「自然と人生」をものし、作中の「湘南随筆」で湘南をうたったことは事実である。蘆花は当時、この「自然と人生」でベストセラー作家になったのだから、この作品により湘南という名がいつそ世に広められたことも確かだろう。</p> <p>問題は、いつ、だれが、この「湘南」という名称を使い始めたか、である。引用した3つの事典はもちろん、その他の事典、辞書の類は、私が調べた限りこの点に言及しているものはない。むしろ、蘆花の創造ではないだろうから、蘆花もどこからかこの名称を聞いたのであろう。湘江を見た人から直接聞いたのか？文化人など特定の人々のあいだですでに周知のものであったのか？</p> <p>神奈川県中南部の相模湾に面した大磯町。この大磯の市街地の西辺の鳴立沢に、東海道一のか歌塾として知られた史跡、鳴立庵がある。庵の名は、西行法師が東国に旅した際詠んだ、あの有名な一句「心なき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮」（新古今集）に由来する。この庵内に、およそ1メートルほどの高さの古びた石碑が建っている。裏面に、風化して読みにくい「看盡湘南清絶地（ああしょうなんせいぜつのうち）」とはっきりと碑文が刻みこまれている。小田原の文化人崇雪が、寛文 4 年（1664）、ここに庵を結んだ時に建てたものである。「湘南」という言葉自体は中国・唐の詩人李白がすでに詩の中で使ったことが分かっている。しかし素朴な疑問はわく。たとえば<u>李白の詩と鳴立庵の碑文と蘆花はどこでつながっているのだろうか</u>。それとも李白の湘南と 300 年前の湘南と蘆花の使った湘南とはそれぞれ別のルーツをもつものなのか。なぜである。</p> <p>★「湘南の逆襲」三觜貴義、神奈川県新聞社、1987、p39-40</p>
<p>湘南の由来 1 -2 「湘南の逆襲」 三觜貴義2 ★新しい湘南と古い湘南という考え方 ★「相南」という新説</p>	<p>■私は湘南は2つにわけて考える必要があるのではないと思う。「あたらしい湘南」と「ふるい湘南」と。「ふるい湘南」とは、湘南が風光明媚な中国の湘江南岸のイメージを持たされていた時代のものであり、「あたらしい湘南」とは、石原慎太郎の「太陽の季節」に端を発し、加山雄三の出現でその原型を完成させるライフスタイルとしての湘南のことである。それは一時的に藤沢を中心とする相模湾沿いのまちに集約される。湘南の定義についての 20 年前の事典と現在の事典との間の相違は、じつはこの点に原因があったように思う。（略）湘南の名称についてはどうであろうか。相模国南部を縮めて「相南」。そして、風光明媚な中国湘江の「湘」を拝借し、「相」と「湘」を入れかえて「湘南」としたという説明がある。しかし、この「相南」ということばそのものがことばとして定着した様子どこにもみられない。相模国は長い歴史を持っているのだから「相南」ということばがもしあったとしたら「相南」もふるくから人々が使っていたはずである。それがそうでないのである。だとすれば、「相南」ということばは架空のものであるかもしれない。理屈としては存在するが実際には使われたことが無かったのかも知れない。とすれば、「相南」とは何か。それは湘南を導くための単なる道具、理由づけにすぎなかったのだと考えることはできないだろうか。その上、<u>李白がすでに「湘南」ということばを使っているのだ</u>。私には「相模国南部→相南→（湘江）→湘南」というこのとりすました図式が、なぜか最初から「出来過ぎている」感じがしてならなかった。私は思う。<u>湘南は初めから李白の湘南ではなかったのかと</u>。</p> <p>■つまり、こういうことだ。相模国は厳然として存在する。そして、その相模国のど真ん中を大きく東西に 2 分して南北にゆったり流れる川がある。相模国（神奈川県）最大の川、相模川である。相模国の成立以前、この流域を支配していた相武（さがむ）国の時代から、古来どこの川でもそうであるように、相模川も重要な物資、文化の運搬路であった。県北の丹沢、津久井の村々が、河口の須賀湊（現平塚市域）を経由し、東は江戸、西は伊豆下田と結ばれていたのだ。相模川の右岸に展開する広大な沖積平野と左岸に広がる肥沃な相模野台地。富が約束さ</p>

	<p>れ、加えて、富士山を背景とした、丹沢、箱根、そして長い海岸線など四季おりおりの美しい自然があった。相模川は豊かな水量をたたえ、夏の陽にキラキラと輝きながら永遠へと流れ下った。相模国における相模川の実在はそれほど圧倒的だった。そう考えると、中国の湘江をいきなりこの相模川に比することも可能ではなかつたらうか。川が重要であった時代なら、いくら湘南が文人の気まぐれから生まれたとはいえ、「湘江＝相模川、湘南＝相模川一帯」と素直に考えるのが自然だと思う。相模川は津久井郡で平野部に入るから、風光明媚でさえあるなら、もはやこの地点から湘南だと考えたっていい。そうすると相模国は全体が湘南有資格地域ということになる。これが私のいう「ふるい湘南」のことである。</p> <p>「ふるい湘南」を前述したものの中からいくつかひろってみよう。明治 22 年から昭和 30 年まで旧津久井郡に存在した湘南村。明治 39 年から昭和 12 年まで中郡二宮町を走った湘南馬車鉄道（湘南軽便鉄道、湘南軌道鉄道）。大正 10 年藤沢に創立された湘南中学（現高校）、逗子に海水浴客を運ぶために昭和 5 年横浜日ノ出町を起点に営業を開始した湘南電気鉄道（現京浜急行の前身）。相模湖河口にかかる湘南大橋（平塚、昭和 11 年完成）。横須賀の湘南女子高等学校（昭和 23 年校名変更）。平塚市の自然公園である湘南平（昭和 33 年、それまでの呼称「千畳敷」を改称）。昭和 44 年、神奈川県中地方事務所を改組してスタートした神奈川県湘南地区行政センター（平塚）。</p> <p>★「湘南の逆襲」三觜貴義、神奈川県新聞社、昭和 62、p80-84</p>
<p>湘南の由来 12 「城山風土記」 編集城山町</p>	<p>■小倉村と葉山島村は合併し湘南村として発足した。名称の由来は相模川を文人たちが「湘江」と呼んでいたところから湘江の南にある二か村が一つになることから湘南という名が生まれた、と伝えられている。発案者は戸長で小倉村に住んでいた馬場健二で、かれは漢詩人大沼枕山の下で塾生として修業を積んだ人であった。</p> <p>★「城山町史7・通史編・近現代」編集城山町、発行城山町、H9、p148</p>
<p>湘南の由来 13 「新・神奈川県 の地理」 神奈川県高等 学校教科研究 会</p>	<p>■<湘南の名は中国生まれの神奈川県育ち>湘南という地名は、中国の洞庭湖の南部に注ぐ湘江付近の風光明媚な景勝地を指したのが始まりで、日本では漢詩を通じてその名が知られるようになった。この地方が湘南と呼ばれるようになった理由の定説はないが、相模国南部であることから「相南」となるはずのところ、中国の湘南にあやかって「湘南」となったというのが、有力な説である。</p> <p>この地域では、江戸時代の初めに大磯の鳴立庵の初代庵主崇雪（そうせつ）が、鳴立庵の石碑の碑文に「著盡（あ）湘南清絶地」と刻んだのが湘南という地名を使った最も古い記録であるとされており、碑は 1664 年に建立されている。明治時代に入り、徐々に湘南の名が使われるようになった。1881（明治 14）年に大磯で民権運動の結社「湘南社」が結成され、1889 年には湘南村（現在の城山町の一部）が登場した。後者は、今日でも湘南小学校という校名に名残をとどめている。また 1885 年に日本最初の海水浴場が大磯に設けられた。これを契機として、湘南海岸一帯に別荘・保養所・療養所が並ぶようになり、リゾート地としてのイメージが成立していった。</p> <p>しかし湘南という地名が一般的に使われるようになったのは、徳富蘆花が 1897 年に逗子に移り、「湘南雑筆」を収めた随筆「自然と人生」を発表してからである。さらに湘南という地名が全国的に知られるようになったのは、第 2 次大戦後の事である。県立湘南高校が甲子園で優勝したこともあるが、なんと言っても逗子を舞台とした石原慎太郎の「太陽の季節」の映画化が、湘南イコール海と若者というイメージを決定づけた。そして、湘南サウンド、サザンオールスターズ、チューブなど、若者の歌の舞台であり続けている。</p> <p><イメージが先行する湘南>湘南の持つイメージをまとめると、次のようなことがあげられる。海に面した開放的で、景勝地としても優れている。気候に恵まれ、冬は温暖、夏でも比較的涼しい。かつての政財界人や文化人に代わり、現在では若者が主役で、若者の風俗の発信地となっている。このように、行政区画や歴史的な経緯よりもイメージが先行しているため、時代と共に湘南の中心も移動している。戦前においては、徳富蘆花や国木田独歩が湘南の名を広めたため、逗子付近から藤沢・茅ヶ崎を経て平塚にかけてが代表的な地域で、別荘・療養所が並ぶ地域であった。</p>

	<p>(略)その後、石原慎太郎の「太陽の季節」では磯である逗子・葉山が舞台となり、東に中心が移った。しかし、サーフィンや海水浴に人気が集まる現在では、砂浜である江の島付近から茅ヶ崎の烏帽子岩にかけてが、湘南のイメージを代表する地域であると言える。</p> <p>★「新・神奈川県地理」伊倉退蔵監修、川嶋理夫(神奈川県高等学校教科研究会)、1996、p150-151、</p>
<p>湘南の由来 14 「うしろにみる小田原」 深野彰</p>	<p>■中国湖南省にある洞庭湖へ流入する瀟水と湘江が合流する地域の風景が「瀟湘八景」と言われており、古来より、風光明媚な水郷地帯として知られていた。湘江の南部地域が「湘南」と呼ばれ、かつては長沙国湘南県であった。宋代の湘南の地は禅宗が盛んで、鎌倉時代には多くの渡来僧が来朝して、鎌倉など相模地方に臨済宗や曹洞宗などの禅寺を開基した。中国へ渡った日本の留学僧も瀟湘八景に憧れて、相模湾一帯を中国の湘南に擬したという。</p> <p>崇雪が刻んだ標石は、「湘南」の文字が確認できる最古のものだという。鳴立庵から東側の国道1号線脇に「湘南発祥の地」の石碑が立っている。また鳴立庵の近くには「海水浴場発祥の地」という道標も立っている。初代陸軍軍医総監だった松本順(1832~1907)が日本で初めて大磯に海水浴場を開設したことを示している。(略)</p> <p>「湘南」の地名が広く知られるようになったのは明治時代である。作家徳富蘆花(1868~1927)は、1898年、随筆「湘南歳余」を新聞に連載した。逗子に移り住んだ蘆花が、逗子の自然を描いた随筆である。翌年、蘆花は1年間記した日記を「湘南雑筆」と随筆に編集し、1900年に随筆集「自然と人生」を出版した。江戸時代には大磯の海岸のみが「湘南」と呼ばれていたのだが、蘆花の作品によって相模湾の海岸地域一帯が「しょうなん」の地名として全国的に広まった。</p> <p>■崇雪以前では、渡来僧の木庵(1611~1684)が箱根町の長興山紹大寺でつくった「湘江雪浪」という詩で、相模湾一帯を指して「湘江」と呼んだ記録がある。また、禅僧鉄牛(1688~1703)が海老名市の瑞雲山竜峯寺でつくった詩では、相模川を「湘川」「湘浦」と呼んでいる。</p> <p>★「うしろにみる小田原」、深野彰編著、新評論、2016、p220-222</p>
<p>湘南の由来 15 「湘南の文学めぐり」湘南紀行文学会同人編</p>	<p>■ともあれ、古事記や万葉の昔から、気候や風光美に恵まれた湘南の地は、人の住みつくところであったし、文人墨客の遊ぶところであった。したがってこの地を素材にした文芸作品は、その数、枚挙にいとまがないほどで、かつて歌人の吉井勇が夏の鎌倉でよんだ「きみがため蕭湘湖南の少女は われと遊ばずなりにけるかも」という歌があるが、これは風光美の典型といわれた中国、湖南省の洞庭湖を巡る景観に、相模湾一帯の景色をなぞらえたものであろうが、李白や杜甫のそれとはちがうにしても、いかにも湘南という名称と相模湾の景色が一緒になって新しい独特のニュアンスを感じさせてくれるし、すがすがしい文学のふるさと湘南の感情が美しくひびいてくる。湘南の地名については、序章で郷土史研究家の高瀬慎吾氏が深く文献に照らして解説を試みているので省くとして、富士の雄姿を背景に、丘あり、平野あり、川あり、島ありで、湘南は、海と山のあらゆる風景の画廊であるといえよう。</p> <p>★「湘南の文学めぐり」湘南紀行文学会同人編、1968、p19-20</p>
<p>湘南の由来 16 「フリー百科事典ウィキペディア (wikipedia)」</p>	<p>■『湘南とは、もともと現在の中国の湖南省を流れる湘江の南部のことで、かつては長沙国湘南県が存在し、中世には禅宗のメッカとなった。日本における「湘南」も禅宗の流入に伴って広まったと考えられ、禅宗を保護した鎌倉幕府の北条得宗家が居し、国内初の禅寺「建長寺」や「円覚寺」を擁した鎌倉周辺の地域が中国の「湘南」にちなんで名付けられたといわれる。実際に、円覚寺の僧夢窓疎石の周辺には「湘南」を冠する人物・建築が散見される。</p> <p>また、1664年頃、室町時代に中国から日本に移住した中国人の子孫が小田原に居していろいろ商人となり(崇雪という人物)、自ら創設した大磯の鳴立庵に建てた石碑に「著盡湘南清絶地」と刻んだものが、現在の神奈川県周辺域における呼称の起源ともいわれる。この石碑は複製品が作られて鳴立庵の庭にあり、本物は磯町が管理している。』</p> <p>■明治期の「湘南」：江戸期に大磯発祥の命名とされる「湘南」は、明治期に政治結社名や合併村名に用いられた。相模川以西地域が湘南、相模川以東地域は湘東または新湘南という</p>

	<p>認識だった。明治期の「湘南」は、山と川が織りなす景観を持つ相模川以西に限られていたと考えられる。</p> <p>明治維新により、当時西洋で流行していた海水浴保養が日本にも流入し、適した保養地として逗子や葉山、鎌倉、藤沢など相模湾沿岸が注目されて、湘南文化が芽生える。1897年、赤坂から逗子に転居した徳富蘆花が逗子の自然を国民新聞に「湘南歳余」として掃海する。翌1898年、元日から大晦日までの日記を「湘南雑筆」として随筆集「自然と人生」(1900)を出版する。これを端緒に「湘南」は、当初の相模川西岸から、相模湾沿岸一帯を表すよう変化する。</p> <p>★「フリー百科事典ウィキペディア(wikipedia)、項目「湘南」、H26,11、H29,3,6,</p>
<p>湘南の由来 17</p> <p>湘南は小田原なり</p> <p>★</p> <p>2016,1,12, アサヒプロ・ASAHI ネット BLOG サービス、</p>	<p>■憑欄夜静驛邊樓、烏鵲翻飛對客愁、江左隨來千里月、湘南望盡八州秋、風徐崇滄海濤聲穩、天朗關門真氣浮、匹馬明朝踰岑去、何堪曉露濕征裘 これは松村延年が「湘南」を詠んだ漢詩です。詠んだ年は不明ですが、享保から天明年間(1730~1784)の作だと言われています。ウィキペディアでは、「湘南」の地名の由来を、中国の湘南地方に結び付く説をとっています。実は京都西芳寺(苔寺)に「湘南亭」という重要文化財が残っていますが、元は南北朝時代の庭園建築で、この「湘南」も中国から渡来した名前だとすれば、相当歴史が古いものになります。但し、当時の西芳寺には「湘南亭」のほか、「漂北亭」と呼ばれる建物が対で存在していたようで、その命名のルーツがよくわかりません。もしかして、「湘南亭」が中国の湘南地方と似た名前になったのも、偶然の一致に過ぎないかも知れません。現在、神奈川県周辺が湘南と呼ばれる起源について、ウィキペディアでは以下のように記しています。</p> <p>「室町時代に中国から日本に移住した中国人の子孫が小田原に居ていろいろ商人となり(崇雪という人物)、自ら創設した大磯の鳴立庵に建てた石碑に「著盡湘南清絶地」と刻んだものが、現在の神奈川県周辺域における呼称の起源ともいわれる。」しかし、これ以前にも神奈川県周辺で「湘南」が使われていたそうです。石井啓文の著作によれば、天文12年(1543)、鎌倉明月院で禅興寺の無隠法常老師が「湘南葛藤録」を印施したそうで、<u>鎌倉が既に湘南と言われていたことが窺えます。</u>(「<u>小田原の郷土史再発見</u>」2001年)。</p> <p>平塚の郷土史家故高瀬慎吾は、「湘南の「湘」は「相」の雅称ということが<u>適当</u>であろう」と書いています。(「湘南の文学めぐり」、1968年)神奈川県内、横浜、川崎の両市を除く大部分は、近世まで相模国と称され、相州とも略されます。「相陽」という言い方もありますが、「山南水北日陽」とある通り、相州の南であり、相南、湘南と変わっていった可能性があります。ここに、中国古来の「湘南」と混同、もしくは意識的に結びつけたというのが事実かも知れません。</p> <p>昭和30年、元東京都知事の石原新太郎が著書「太陽の季節」で文学界新人賞、芥川賞を取り、舞台となった葉山・逗子まわりは「湘南族」なる流行語が生まれる程のブームとなりました。一時期、「湘南」は葉山・逗子のイメージが主流になっていたそうです。しかし、現在の「湘南」の代表的なイメージは、やはり藤沢・茅ヶ崎あたりでしょうね。樓神奈川県の行政区域では、平塚、大磯、二宮なども含まれます。大磯の国道沿いに「湘南発祥之地」の石碑が建てられていますが、歴史を考えれば、この発祥はかなり怪しいです。車のナンバープレートで「湘南」は人気があるようで、これはかなり広範囲で使われています。冒頭の漢詩、注目すべきはそのタイトル「宿湘南驛[小田原也]」となっています。どうも中世に「湘南」と称された鎌倉一帯は江戸時代は「湘中」となり、そして、「湘南」は小田原なり、と江戸時代ではなっていたようです。(「小田原の郷土史再発見」) by T.Fujimoto {コメント(0)Iトラックバック(0)}</p> <p>★2016,1,12, アサヒプロ・ASAHI ネット BLOG サービス、</p>
<p>湘南の由来 18</p> <p>神奈川県都市部なぎさ・相模川プラン推進</p>	<p>■湘南地方の「湘南」とは、相模の国の南という意味で、「相南」というべいではありますが、中国東南内陸部の湖南省洞庭湖の南岸にある「瀟湘湘南」の景勝にあやかり、「湘南」と名づけられました。いつ頃からこれが使われるようになったかは明瞭ではありませんが、大磯にある鳴立庵の碑に「ああ湘南清純地・・・」と書かれてあります。年代は1664年ですので、既に江戸期には使われていたことが分かります。しかし、一般的には明治以降から多く使われるようになったのでしょう。「湘南」の呼称を世に広めたのは、1897年(明治30年)に東京から逗子に越してきた徳富蘆花で、彼は名作「不如帰」をあらわし、「湘南雑筆」などを収めた随筆「自然と人生」を発表して湘南の名を天下に広めました。★「湘南なぎさプランシリーズ Vol.1 湘南の</p>

室	歴史」神奈川県都市部なぎさ・相模川プラン推進室、
湘南の由来 19 Net 情報: 「湘南プロムナード」	<p>■湘南の由来には、大きく分けて、「相模国の南」の地域を意味する相南という言葉にさんずいがついて、湘南になったという説と、日本地名研究所編の「藤沢の地名」によりますと、『「湘南」の湘は、中国湖南省東部の洞庭湖に注ぐ川、湘江（湘水とも言う（全長 817 キロメートルの川））の湘をとったものであり、さらに、相模の国の相と、その南であるという意味で湘南になったものと思われる』という説があります。</p> <p>藤沢市教育委員会発行の「湘南の誕生」によりますと、『湘南の由来には、大きくわけて、相模国の南の地域、を意味する相南という言葉にさんずいがついて湘南になったという説と、中国湖南省の洞庭湖に注ぐ瀟水と湘水の2つの川が合流するあたりの絶景を「瀟湘八景」といい、金沢八景などの名勝の原型であるが、江戸初期の沢庵和尚が江ノ島の風景を「瀟湘」に譬えたと伝えられている。いわば文人趣味の世界に現れた名称であり、雅号としての使用例は、中世の禅僧の湘南宗？や明治の漢詩人大久保湘南などにも、見られるが、これが地域名として使用され、箱根を函谷関に比定するのと同様に、「東洋のマイアミ」ならぬ「日本の湘南」として相模湾沿岸を呼んだというのである。』とあります。いずれにせよ、歴史地理的根源の土地名、行政区分名でもありませんが、「湘南」というイメージは、今後も語り継がれていき、定着していくと思われます。</p> <p>★Net 情報:「湘南プロムナード」エムワイスター、http://m-y-star.com,http://m-y-star.net、最終更新日 2017:03:01、「湘南の発祥」</p>
湘南の由来 20 Net 情報	<p>■そもそも「湘南」という言葉の語源として有力なのは、中国の湖南省の景勝地から取られ、「相模国の南部地方」＝相南に引っかけているという説だ。この考えに従えば相模湾一をまとめて湘南と呼んでもよさそうだが、「平塚から大磯にかけて」「葉山から茅ヶ崎にかけてのエリアが一般の湘南イメージに沿う」「ウチは湘南ではありません」など諸説あってはっきりしない。ちなみに、現在の相模原市緑区には 1955 年まで「湘南村」が存在し。</p> <p>★Net 情報:「J タウンネット」、長年の論争「『湘南』はどこからどこまでか」問題についてに終止符が打たれる!</p>
湘南の由来 21 Net 情報	<p>■湘南については、その由来にも、範囲にも、それぞれ争いがある。まず由来の点は、歴史そのものだから、なんといっても古文書が無ければ語れないが、残っている古文書は稀少だし、残っていても、記載の真偽が問われる。ゆえに、遑って歴史を論ずるのは自由。だからこそ歴史はおもしろいといえる。裁判で、お互いの言い分（主張）はあるけれども、その証拠があるのか、あるとして、真偽は定かかを問い、真相を探るのに似ている。</p> <p>元々、<u>中国にある河川「湘江」の南部に、古代は長沙国湘南県という所があって、そこから転じたのは争いがないようだ。これを前提に、一説は、その地は禅宗が栄えていたと。日本では鎌倉仏教が禅宗。だから、鎌倉時代に禅宗の僧が鎌倉周辺を湘南というようになった・僧が書いた古文書に湘南の文字がある。これが、この説である。鎌倉説ということにする。</u></p> <p>他方、室町時代に大磯の鳴立庵に「著盡湘南清絶地」という石碑が建てられたことを由来とする説もある。室町説と呼ぶことにする。<u>鳴立庵から相模川を望む河口付近が湘江のそれを思わせたからともいわれ、ここでもキーワードは湘江。</u>（ちなみに、本記事は上記石碑のレプリカが 2016 年新たに大磯駅前に設置されたことから執筆した。）</p> <p>昭和に入り、太陽族とサザンオールスターズで、江ノ島付近（藤沢）と隣接の茅ヶ崎が湘南の中心となる。これは、由来というよりはむしろ範囲のほうの見解となるが、昭和説と呼ぶことにする。</p> <p>範囲の点は、これら3つの説を軸に、その系統あるいは亜種に位置づけられる説が百花繚乱の様相を呈し、湘南とはどこのかが熱く語られる。ちなみに、神奈川県南岸の自治体は、西から順に、湯河原、真鶴、小田原、二宮、大磯、平塚、茅ヶ崎、藤沢、鎌倉、逗子、葉山、横須賀、三浦、横須賀、横浜、川崎である。真鶴半島と三浦半島に挟まれた小田原～三浦までが相模湾。湘江に見立てられた相模川は、平塚と茅ヶ崎の市境を南北に流れている。例えば、葉山・逗子を湘南であるという人は、鎌倉説を軸に鎌倉とのゆかり（頼朝と三浦一族）のほか、（昭和説が</p>

	<p>混じって) 太陽族といえば石原裕次郎・慎太郎であって、この兄弟の住まいが逗子であったこと、観光地としては江ノ島と鎌倉は一体で、だとすると、鎌倉と逗子・逗子と葉山は相互に一体であって全体で1地域をなすとして葉山・逗子は湘南であると論じる。</p> <p>また例えば、平塚を湘南であるという人は、室町説を軸に、湘江に見立てられた相模川及びその河口は正に平塚に属するし、<u>地域的に平塚は大磯に隣接し一体性があり</u>、室町説には当然平塚が含まれると論じる。そして、昭和説に対しては、歴史の浅い新出説と批判し、鎌倉説は、湘江に見立てられた相模川から見ると、位置的に遠すぎると批判するのである。</p> <p>一方で、平成6年に湘南ナンバーが相模ナンバーから分離され独立した。これにより、上記自治体のうち、藤沢以西は小田原までのみならず、湯河原や、海に面していない秦野、伊勢原、南足柄、足柄上・下郡もが湘南ナンバーの地域となった。そして、これらすべてが湘南であると論じられるようになる。平成説と呼ぶことにする。</p> <p>平成説の出現により、範囲の点では最有力説であった昭和説が正当化され、のみならず、室町説も追認されることになったといえる。ところが、新たな問題として、海に面さない秦野等や足柄地域までもが湘南なのかという派生的争点と、鎌倉以東は湘南ナンバーではないので、鎌倉説が覆され、鎌倉説を強い根拠としていた逗子・葉山も湘南であることが覆されかねないという、仁義なき蒸し返し論争までもを招くことになった。こうなると、もう由来や範囲をどうのこうのすること自体煩わしい。それに、単に神奈川県内の一部地域内部の論争にすぎず、そもそも他県民にとってはどうだってよい話なのだろう。</p> <p>そこで、調べた範囲では論者がいないが、「湘南」という漢字に着目し、それだけ解決する問題と考えてしまうのはどうか。漢字に着目するだけでいいなら、相にサンズイがついて南、であり、相は相模国を意味し、サンズイは水を意味し、南は文字通りであるから、単に、「相模国の南部の海沿い」の意だ。相模国という呼ばれ方は律令時代の西暦 700 年代から始まるとのこと。その後、鎌倉時代までは 400 年(1100 年代)、なお室町時代までは 600 年(1300 年代)。相模国という名の周知後ほどなく、その南部の海沿いは湘南とされたのではないかと書けば、位置や範囲がすぐ分かり、都合がよいというのも理由のひとつ。そうであれば鎌倉時代よりもっと前から湘南という場所も使われ方もあったと言える。</p> <p>従来、由来として最古の鎌倉説も、鎌倉時代の僧は漢字が書け、かつ、稀少な古文書として残っただけのこと。室町説も石碑として最古に過ぎないだけ。昭和説はトレンド、平成説はナンバーというだけとなる。恐れ多い独自説であるが、律令制が整ったのは奈良時代だから、奈良説と呼ぶことにする。</p> <p>★Net 情報、by ofuna-law 2016-02-25.09:28,地域の出来事、歴史、研究等、2017,03,07</p>
<p>湘南の由来 22 サライ 湘南今昔物語</p>	<p>■現在、相模湾一帯を「湘南」と呼びならわしているが、「湘南」という言葉には、不思議に人を魅了する響きがあるようだ。もともとは中国の景勝地を指すこの言葉が、なぜこれほどポピュラーになったのか。その歴史を辿ってみた。</p> <p>■「湘南」とは、日本古来の地名ではなく、外来語である。中国・湖南省の瀟水・湘江や洞庭湖一帯の風光明媚な地を示す「瀟湘湖南」に由来する。「中国湘南」に対する憧れは漢詩を通じて日本にも早くから伝わり、南北朝時代に復興した苔寺(京都・西芳寺)の茶室にも「湘南亭」の名がつけられている。<u>こうした憧れの名前をいち早く明治時代につけていた村がある</u>。現在の神奈川県津久井郡城山町、「湘南村」である。明治 22 年(1889)の市町村制施行にともない、それまで独立した村であった小倉、葉山島村が合併することになった。新しい村名をどうするかを経緯が、湘南村誕生秘話へとつながるわけである。当時は合併する市町村名を 1 字ずつ組み合わせ、新しい名前にする場合が多かった。東京の大田区が旧大森区と旧鎌田区の合名であるように。ところが、小倉と葉山島では、小葉(こは)と詠める)や小島(隣に大島村があり負けてしまう)では面白くないと、なかなか決まらなかった。</p> <p>「<u>祖父が県庁に呼ばれましてね、村の名前について即答を迫られたんです。そこで頭に浮かんだのが「湘南」だったようです</u>。若い頃に江戸で漢学を学んでいましたから、<u>当時の文人たちが相模川のことを湘江と呼んでいたのを知っていたんでしょ</u>う。「湘江の南側にある2か村が一緒になるのだから、湘南という名前はどうか」と県庁の役人に言ったそうです。結果的</p>

	<p>には、県の命名ということになりましたが、祖父の発想から「湘南村」が生まれたようです。こう語るのは、城山村小倉に住む馬場厚氏。祖父とは、当時の連合戸長（地区の代表）で湘南村の初代村長となった故・健二氏のことである。村としての湘南は、昭和 30 年の再合併で消えてしまったが、明治 39 年創立の湘南小学校の校名が、今も湘南村の存在を伝えている。当時の校舎も既にないが、校名の刻まれた彫刻板が、現在の校舎の職員室前の壁に掛けられている。相模川の静かな流れは、100 年以上前に人々が思い描いた「瀟湘湖南」の風景をそのまま保っている。</p> <p>■（写真の説明1）馬場家に伝わる村区議会議長用の覚え書き。明治 24 年、湘南村と書かれた表紙は、今の相模湾一帯の湘南に先立ち、山間の村に湘南の名があったことの何よりの証拠。（写真の説明2）湘南小学校に保存されている校名の彫刻板。明治 41 年に、近くの寺の住職が腕をふるったという凝った書体。中央に右から「湘」「南」とある。</p> <p>★サライ「湘南今昔物語」1992（H4）小学館 p18～19</p>
<p>湘南の由来 23 「地図で楽しむ すごい神奈川」 都道府県研究会</p>	<p>■そもそも湘南とは、正式な地理的名称ではない。「下町」や「山の手」と同類の曖昧な地域呼称である。だから範囲もハッキリしないのだ。</p> <p>■湘南の発祥は大磯にあり!?湘南の発祥は、大磯町にある鳴立庵の脇の石碑に見ることができる。碑には「著盡湘南清絶地」と刻まれている。約 350 年前に小田原の崇雪という中国出身の商人が、故郷の中国・湘江南方の風景に大磯の海辺の風景が似ていることから、「ああなんて湘南はすばらしいところなのだ!」という意味の文を残したことにちなんだもので、これが湘南の起源といわれている。このほかにも「相模の国の南」の「相南」に、海辺ということから水を意味するサンズイが付いて「湘南」になったという説もある。いずれにせよ、湘南と呼ばれた大磯町が湘南エリアにあるのは間違いなからう。さらにいうなら、湘南はそもそも別荘地としてスタートしたが、それは大磯町から始まって東へと伝播していった。現在の大磯町はけっして湘南のイメージをそうきさせる場所ではないが、湘南の土台をつくった街として、湘南のくりに入れるべきなのである。</p> <p>★「地図で楽しむすごい神奈川」都道府県研究会、洋泉社、2017、p36-37</p>
<p>湘南の由来 24 「日本全国発祥の地事典」 日外アソシエーツ</p>	<p>■湘南とは、中国の湖南省を流れる湘江の南部のことで、中世には禅宗のメッカであった。禅宗の流入とともにこの知識が広まり、鎌倉を湘南と呼んだという説がある。一方、大磯は西行法師が東国行脚の際に「心なき身にもあわれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮」と詠んだ地として知られている。この名歌を慕い草庵を結んだ崇雪という人が「著盡湘南清絶地」とその景勝を称えて呼んだという。これにより、大磯が湘南の発祥ともいう。[碑名]湘南発祥の地 [所在地]神奈川県大磯町大磯/鳴立庵</p> <p>★「日本全国発祥の地事典」日外アソシエーツ(株)編集発行、紀伊国屋書店、2012、P215</p>
<p>湘南の由来 25 「湘南ルーツどこにある」 朝日新聞デジタル</p>	<p>■歴史探して大磯・伊勢原・相模原・・・江戸時代に俳人が標石</p> <p>■自由民権運動が村名に「湘南」という言葉が最初に使われたのは、いつ、どこでだったのだろうか、とふと思ったのがきっかけだった。藤沢に住んで 2 年半、茅ヶ崎でも、平塚でも、まちで目に入るのは「湘南」ばかり。まるで本家争いをしているかのようだ。ならば、と湘南の「歴史探しの旅」に出たのだが・・・</p> <p>「このあたりです」と学芸員の富田三紗子さんが指さした。大磯町郷土資料館の中庭に置かれた標石。町を挙げ、「湘南のルーツは大磯」とアピールする根拠とされている。小田原の俳人が 17 世紀半ば、かつて西行法師が名歌を詠んだ沢に建てたという。保存のため資料館に移された。一部が風化して読み取れないが「著盡湘南 凄絶地（湘南とは何と素晴らしいところか）」と刻まれている。ただ、ほかに有力候補があるかといえば、富田さん、「残念ながら、ないんです」。</p> <p>江戸幕府が瓦解して明治政府ができ、まず登場するのが、薩長政権に対する国会開設運動が勢いを増すなかで生まれた民権結社「湘南社」だ。伊勢原や大磯などの豪農や医者、教師</p>

	<p>ら地域の指導層約 150 人が参画、1881 (明治 14) 年 8 月に大磯で創立大会が開かれた。社長の山口佐七郎の家が大山のふもとの伊勢原市に今もある。指折りの豪農で、郡長だった佐七郎は憲法制定をめぐり県令と論争の末、郡長を辞任。湘南社設立 135 周年の今年 6 月、功績を顕彰する碑の除幕式が開かれた。山口家には湘南社の学習資料などが大量に保管される。だが佐七郎の日記にも、なぜ「湘南社」と名付けたかの記述はない。</p> <p>湘南の語源は、中国・湖南省の洞庭湖に注ぐ湘江周辺の景勝地の呼称にあるという。湘南社を研究する厚木市の豊雅昭さん(68)は「相模川を湘江にみたと、大磯から伊勢原にかけての<u>一帯を湘南にたとえたのでは</u>」。佐七郎のひ孫で元大学教授の匡一さん(82)も「漢詩がわかる当時の知識人は中国文化に憧れたのでしょう」。</p> <p>1889 (明治 22) 年、県北端の相模川そばの 2 村が合併し「湘南村」が生まれた。湘南とついた市町村は今もこの村だけである。名付け親は漢詩に詳しく、自由民権運動でも活躍した初代村長だった。湘南村のあたりを車で走った。いまは相模原市緑区の一部だ。110 年前に開校した湘南小学校は、いまも同じ場所にある。近くの「湘南寺」という臨済宗の寺が目に入った。戦後まもなく三つの山寺が合併し、この名が付けられたという。</p> <p>山田文央住職は「人々の生活に相模川の影響はとて大きかった。湘南といえば、やはり禅宗の影響でしょうなあ」。中国・湖南省の湘江のあたりは禅宗とゆかりが深い。鎌倉時代に強い影響力を持ったのが臨済宗。渡来僧を含め、多くの僧が旅した。</p> <p>湘南の呼称に詳しく、平塚市史編さんに関わる関恒久さん(68)は、室町時代の臨済宗の僧で文人の万里集九(ばんりしゅうく)の記した紀行漢詩文集「梅花無尽蔵」に注目すべきだと言う。1485 年、集九が相模の国に入るくだりに、「<u>鎌倉の辺りて湘という字を使うのは昔から</u>」と注釈がある。また、江戸に滞在する集九のもとを、鎌倉の建長寺にいた友人が水仙を手を訪れるくだりでは、鎌倉を「湘南」と書いている。平塚市博物館元館長の土井浩さん(71)は、京都・西芳寺の茶室「湘南亭」を例に「一般に、臨済宗の古刹を旅の僧が訪れ、湘南と付けるのはまああったのでないか」とみる。ただ、庶民の間に「湘南」が普及していたかは資料に乏しく、わからない。</p> <p>明治の民権結社・湘南社は当局の集合規制強化で、ほどなく解散に追い込まれた。だが、参画者には政財界で活躍した人も多い。政治家・実業家の福井直吉は創成期の江ノ電の設立発起人に名を連ね、初代大磯町長になった中川良知は海水浴場開設の道を開いた。東西交通網の発展や鶴沼(現藤沢市)の別荘地開発とともに、「湘南」=相模湾沿岸のイメージに広がる。</p> <p>戦後、石原慎太郎・裕次郎兄弟、加山雄三、サザンオールスターズ登場で、不動の全国ブランドに。沿岸自治体は競って「湘南」を使うようになった。「湘南は憧れのイーハトーブ(宮沢賢治の造語で、理想郷の意)。どこのものにもならないほうがいい。(藤沢市の湘南研究家、吉田克彦さん)</p> <p>「元祖・湘南」に最も近い鎌倉は「湘南鎌倉」とは名乗っていない。(小北清人)</p> <p>★「湘南ルーツどこにある」朝日新聞デジタル</p>
<p>湘南の由来 26</p> <p>「湘南という地名について」</p> <p>日本地名研究所</p>	<p>■「湘南」は江の島・茅ヶ崎などの海岸をイメージさせる言葉として全国的に有名であるが、その範囲となると「相模湾沿岸地帯の称。葉山・逗子・鎌倉・茅ヶ崎などを含む」(『広辞苑』)、「相模湾を意味し、三浦半島の西岸から伊豆半島の根元あたりにおよぶ神奈川県<small>の</small>海岸地帯をいう」(平凡社『世界大百科事典』)、「神奈川県<small>の</small>南部、相模湾に面する一帯を指す地域称」(角川書店『日本地名大辞典・神奈川県』)など一定していない。しかし、おおむね神奈川県南部の相模湾に面する地域を指すというところでは一致しているようである。</p> <p>■「湘南」のイメージを定着させる大きなきっかけとなったのは、明治 33 年に徳富蘆花が「自然と人生」の中で書いた「湘南雑筆」だが、「湘南」という呼称はそれ以前からあり、西行法師の歌で有名な鳴立庵(大磯町)の寛文 4 年(1664)の碑に、「看盡湘南清絶地」と刻まれているのが最古のものといわれる。また、『新編相模国風土記稿』「芸文部卷六」には、江戸時代</p>

	<p>の文人の間では湘南という呼称がある程度定着していたことが想像される。</p> <p>■「湘南」の湘は中国湖南省の洞庭湖に注ぐ湘江の湘をとったものであり、さらに相模国の相と、その南であるという意味で湘南になったものと思われる。一方、北部の津久井郡にも明治22年に湘南村が生まれている。昭和30年に城山町となったが、明治39年にできた湘南小学校は現存している。もともと海岸沿い、あるいは川沿いの美しい風景から喚起される言葉として使われはじめた「湘南」であるが、現代では「湘南」とよぶのはどうかと思われる地域にその名がつけられることも多い。</p> <p>★「藤沢の地名」日本地名研究所編、発行藤沢市自治文化部市民活動課、昭和62年、p116</p>
<p>湘南の由来 27</p> <p>『湘南雑記』 宮南果 わが住む里・ 48号 藤沢市 総合市民図書館発行</p>	<p>■湘南の名は相模の南部を、中国の湖南省洞庭湖の南にある「瀟湘湖南」という景勝地を旅行した明治の文化人が、その美にうたれ帰国してその詩情ある名称にあやかって名付けたものという。寧遠県の九疑山から発する「瀟水」が、広西省海陽県に源を発する「湘江」と途中で合して洞庭湖に注ぐ大河で「瀟湘八景」と呼ぶ景勝の地である。(略)</p> <p>湘南の名は徳富蘆花の「自然と人生」(明治33年8月民友社刊)の文学作品によって広められ、また若き日の歌人吉井勇が鎌倉に遊んで、次のような歌を詠んでいる。『夏は来ぬ相模の海の南風に わが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ君がため瀟湘湖南の少女らは われと遊ばずなるにけるかな 歌集「酒ほがひ」』明治43年のことで、湘南の名が近代文学の作品に登場したのは、この歌が初めてと聞いている。(略)</p> <p>大磯の嶋立庵にある石碑「嶋立沢」とかかれた自然石の裏に「著盡湘南清絶地」と記されている。この碑を建てた崇雪という人は、寛文初年にここに住み、同4年(1664)にこの碑を建てているから、300年以上も前のことになる。今の所これより古い記録が無いので、湘南命名の碑と呼ぶに相応しいものである。崇雪はもと小田原の武士で、外郎家の一族であり、足利時代中国から帰化した陳外郎を祖先としている所から、湘南は中国と奇しき因縁があるようである。(略)</p> <p>湘南のルーツをたどるため、湘南という言葉にこだわって中国の詩で見ると、載叔倫に「湘南即事」というのがあり、李白の詩に「愁帝子千湘南」朴牧の詩には「湘南春又帰」の語句が見える。李白の詩「洞庭湖に遊ぶ」では、湖水に身を投げて川の神「湘君」となった2人の王妃の古い伝説が詠まれているところから、「湘」という字はもともと水辺のイメージがある。]</p> <p>中国で最も風光明媚とされる湖南省洞庭湖附近の8つの景勝は「湘南八景」といい、北宋の宋迪という人が8幅の絵としたもので、それは平安末期のころである。わが国には鎌倉時代に伝来した名画である。伝統的な画題として中国はもちろん、わが国でも盛んに描かれた。</p> <p>横山大観の描いた瀟湘八景は、幻想的な作品で江南の地への日本人の憧れといったものは感じられる。俳聖芭蕉が「奥の細道」で「松島は扶桑第1の好風にして、洞庭湖・西湖を取らず」と言ったのは、昔から中国の湘南の地に並々ならぬ関心を寄せている。それというのも杜甫や白楽天といった詩人たちが、この地に遊んで、素晴らしい詩を沢山残したからである。</p> <p>杜甫や白楽天の時代は、奈良時代の頃に当たるので、湘南のルーツは全く古いことになる。日本の近江八景、金沢八景、みんなこの瀟湘八景の模倣である。新しいのに江ノ島八景があるが湘南八景がない。相模湾を洞庭湖に見立てれば決して引けは取らない。そこで最近画家の田口雅巳さんが「湘南八景」を提唱されて描いていられる。</p> <p>★「湘南雑記」宮南果、「わが住む里/第48号」藤沢市総合市民図書館発行、H11、3、p74-76</p>
<p>湘南の由来 28</p> <p>『「湘南」雑感』重田寿 わが住む里・</p>	<p>■ところで湘南の名の起りは何かと言うと、いろいろのことがいわれている。その中のどれかという決め手はないようである。しかし、各々の説は納得がいくように思われる。今ここに、いくつかの例を挙げてみる。</p> <p>❖例1:大磯の市街地の西辺の嶋立沢に、東海道一の歌塾として知られた史跡、嶋立庵がある。庵の名は西行法師が東国に旅した際詠んだ、あの有名な一句「心なき身にもあはれは知られける 嶋立沢の秋の夕暮れ」(新古今集)に由来する。この庵の境内におよそ1メートルの高さの古びた碑が建っている。裏面に風化して読みにくい「著盡湘南清絶地」とはっきりと碑</p>

<p>55号 藤沢市 総合市民図書 館発行</p>	<p>文が刻み込まれている。小田原の文化人崇雪が寛文4年ここに庵を結んだ時に建てたものである。「湘南」ということは自体は、中国・唐の詩人李白がすでに詩の中で使ったことが分かっている。ただしこれは、中国の地を詠んだことで、わが国の湘南とは直接の関係はないのであろう。</p> <p>❖例2:明治の頃、某文化人が中国に旅したことがあったという。彼は、中国、湖南省の洞庭湖(中国第1の湖)の南にある「瀟湘湖南」という景勝の地を目撃し感に打たれた。帰国しても、ずっとその時の感を忘れることがなかった。湖の景勝の地というのは、寧遠県の九疑山から発する瀟水が、広西省海陽県を源とする「湘江」という流れと合一する。これは遍く知られる大湖である洞庭湖に注ぐ大河である。その文化人が大磯の相模湾を望む地に居を構え、風光を目にしていた。あるとき、風光が素晴らしい、かつて中国を旅したときに見た眺めと非常に似ていると思った。そして、そこから眺めた箇所が、その景勝の地に似ていたのでその言葉を口にしたのが、このことの起こりであるとも言われている。</p> <p>★『「湘南」雑感』重田寿、「わが住む里/第55号」藤沢市総合市民図書館発行、H18,3,p32-34</p>
<p>湘南の由来 29 『「湘南」の誕生』増淵敏之</p>	<p>■最初に「湘南」の語源について考えてみよう。2005(平成17)年の藤沢市教育委員会発行の「湘南の誕生」によると、湘南の由来には、大きく分けて、相模国の南の地域、を意味する相南という言葉に「さんずい」がついて湘南になったという説と、中国湖南省の洞庭湖に注ぐ川に「湘水」があり、その南の風光明媚な地域を指す「湘南」にちなんだという説が紹介されている。</p> <p>また洞庭湖に注ぐ「瀟水(しょうすい)」と「湖水(こすい)」の2つの川が合流するあたりの絶景を「瀟湘八景」といい、金沢八景などの名称の原型であるが、江戸初期の沢庵和尚が江ノ島の風景を「瀟湘」にたとえたと伝えられている。いわば文人趣味の世界に現れた名称であり、雅号としての使用例は、中世の禅僧の湘南涼沅や明治の漢詩人大久保湘南などにも見られるが、これが地域名として使用され、箱根を函谷関に比定するのと同様に、「東洋のマイアミ」ならぬ「日本の湘南」として相模湾沿岸を呼んだというのであると記載されている。</p> <p>中国の「瀟湘湖南」地域は禅仏教が発展した地方であることから、禅に関連した個展や事象に「湘南」の文字を見ることができ、禅僧がその言葉を持ち込んだともいわれている。また大磯の嶋立庵には「著盡湘南清絶地」と刻んだ石碑があり、この庵は俳諧道場として知られているが、1664(寛文4)年に小田原の崇雪が草庵を結んだことを起源としている。ここが「湘南発祥」の地といわれることもある。この石碑は複製品が造られて、嶋立庵の庭にあり、本物は大磯町が管理している。</p> <p>崇雪は、「寛文6年大磯村検地帳」に、屋敷地と畑地の1反6歩を名請すると記載されていることから、この時期、大磯宿に住み、実在の人物であったことがわかっている。また、崇雪には小田原町宿老として伝家の丸薬である透頂香を売る小田原外郎こと宇野家の出であるとの伝聞もある。</p> <p>明治以降になって湘南の文字が歴史に登場するのは1881(明治14)年に設立された「湘南社」だ。この「湘南社」は、大磯を本拠地にして、曾屋(秦野市)、南金目平塚市)、伊勢原にそれぞれ講学所を開設し、民権思想の啓発を目的にした自由民権運動のための政治結社で、活動範囲は洵綾(ゆるぎ)・大住の両郡が中心だった。</p> <p>さらに、1889(明治22)年、津久井郡に湘南村(現・城山村)が誕生する。この湘南村は小倉村と葉山島村が合併して生まれた村だが、その由来は、「角川日本地名大辞典」によれば「相模川を文人が湘江と呼んでいることにちなみ、湘江の南側の村ということである。当地は、山と川が織りなす景観に富んだ地域で、「湘南」の地名は現在、湘南小学校として残っている。</p> <p>このように、江戸期に大磯を発祥の地として命名された湘南は、明治になって、政治結社名に用いられる。この他、湘南を冠したものには、湘南大磯病院(1893[明治26]年/大磯町)をはじめ設立順に、湘南馬車鉄道(1905[明治38]年/二宮町)、湘南煙草合名会社(1907[明治40]年/小田原市)、湘南牛乳株式会社(1908[明治41]年/二宮町)、湘南度量衡器製作株式会社(1911[明治44]年/小田原市)、湘南介立社(1912[明治45]年/小田原市)、などがあり、すべて相模川以西の地域に集中していた。</p>

	<p>また当時は相模川に接した東側の寒川及び茅ヶ崎の一部地域を特に「湘東」と呼んだ。この「湘東」は、湘江に見立てた相模川の東の意味だった。この「湘東」の文字を用いて、1883[明治 16]年、寒川・茅ヶ崎地域の資産家を出資者とする貸金会社「湘東社」が設立される。その後、この「湘東社」は 1925(大正 14)年設立の「高座郡茅ヶ崎町湘東耕地整理組合」に使用され、現在は「湘東橋」という橋名に残っている。</p> <p>つまり明治期、相模川以西が「湘南」であって、相模川以東地域は「湘東」だった。従って明治期の湘南の意味する言葉のイメージは海よりも山と川が織りなす景観を持つ相模川以西地域に限られていたと考えられる。「広辞苑」(第五判)では、「葉山・逗子・鎌倉・茅ヶ崎・大磯など」とし、平凡社「世界大百科辞典」(第 2 版)では、「鎌倉、藤沢、茅ヶ崎、平塚、大磯、二宮、小田原の 5 都市 2 町の相模湾岸を指し、ほかに三浦半島北部の逗子市、葉山町を含めることも多い」とされているが、行政は他の公的機関などの定義もそれぞれで、主体の認識・目的によっても柔軟な対応が取られている。</p> <p>★『「湘南」の誕生』増淵敏之 リットーミュージック 2019,2,28 P12-14</p>
<p>湘南の由来30 『水嶋かずあきの甘辛問答』 水嶋かずあき</p>	<p>■『県が湘南の地域規定をしたそうです」湘南に関わる記事がありましたので紹介します。』</p> <p>湘南と言う地域的な規定に、様々な意見があり、これと言った決定的な領域の確定ができていなかった。そこで、その論争に終止符を打つことになった、と言うのです。県が進めている新プロジェクト「かながわシーブプロジェクト FEEL SHONAN」に、湘南の範囲がはっきり明記されました。</p> <p>ここでいくつかの疑問。まず、この組織はオーソライズされたものだったのだろうか。確かに黒岩知事、木村太郎さんなど、権威としては存在しますが、湘南を語るにふさわしい、裏付けを持っていたかどうかは疑問ですね。つまり、なんとなく知識を持った人たちが議論して、こんなもんだらうと、論争を終わらせるための提案をしたのではないか、という感じがするんです。この記事の中で、『そもそも「湘南」という言葉の語源として有力なのは、中国の湖南省の景勝地から取られ、「相模国の南部地方」=湘南に引っかけているという説だ。この考えに従えば相模湾一帯をまとめて湘南と呼んでもよさそうだが、「平塚から大磯にかけて」「葉山から茅ヶ崎にかけてのエリアが一般の湘南イメージに沿う」「ウチは湘南ではありません」など諸説あってはっきりしない。』と。</p> <p>まず第一の反論。語源として有力なのは、中国の湖南省の景勝地から取られ、とありますが、すでに前提で間違えているんです。<u>湘南というのは、湖南省を三つに分け、北から湘北、中央が湘中、南が湘南と区分して呼ばれていて、そのうちの南の呼称のことで、景勝地として特定されているわけではありません。</u>ただ、湘南がらみの景観地的なことでは、中国の五名山と言われる山があります。東岳泰山、南岳衡山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山の五つ。このうちの、<u>南岳衡山が、いわば湘南のランドマーク的存在なんです。</u></p> <p>さらにその傍ら流れ、洞庭湖に至るまでの川を、湘江と呼び、この湘江、および洞庭湖沿岸が、かつて、盛唐の時代に李白や杜甫によって、優れた漢詩が詠まれ、これが日本に伝わって、湘南の地は風光明媚なところ、という認識になったようです。この湘江、および洞庭湖沿岸を中心として、湖南省としての八景が定められ、瀟湘八景として、美しい景色とそのたまたまの八景が、当時の中国に定着したのです。近江八景や、金沢八景の大もととなったものです。したがって、厳密な地域的な規定をすると景観として、愛でられた地域は、洞庭湖付近、省都長沙、また湘江流域などで、湘南に地域に由来するものは、一つだけです。</p> <p>ですから、清絶地としての意味合いは間違いなくあったと思いますが、景観地としての意味合いは間違いなくあったと思いますが、景観地としての認識は、希望的観測で、実際にはそぐわない観点なんです。<u>湘南の語源的なルーツは「中国の湖南省を全体として湘と呼ばれていて、この湖南省の南部を湖南と言っていた」と、客観的事実から証明するべきでしょ。</u>そして、さらに、ではどうして、日本で湘南という言葉が発生し、定着していったのだろうか、という歴史的事実が論拠のベースにあるべきです。結果として、相模の国の南部に引っ掛けている、と言うの</p>

は、湘南という地域名のいきさつから言って、いわゆる後付の説で、諸説の1つに過ぎません。正確には、大磯の鳴立庵の石碑がすべての原点なのです。

かつて、私達、当時平塚で結成された平塚ひとまち研究会で湘南のルーツを探ろう、と言うプロジェクトを作り、中国湖南をこの目で確かめる旅を企画したのです。この企画に中心的な立場で携わる中で、私は4回ほど湖南省のお役人と事前折衝をしました。で、まずは行き先の確認をしようと言う事なんで、私は、洞庭湖沿岸を主張したのです。理由は、湘南の海岸の風景に似ているところと言えば、広い水面が条件で必要だと思ったからです。だって、湖南省はそもそも山に囲まれているところなんで、海があるわけじゃない。そんな地域で、湘南に似ているという条件は、まずは広い水面がある洞庭湖沿岸だろうと考えたわけです。

ところがお役人たちは、かたくなに、そこではない、と言い張るんですね。湘南はもっと南の地域なんだ、と。湘南の中心的な街が衡陽市です。洞庭湖沿岸からは200キロほど南です。ですから、海に面した広い水面とは程遠い場所なんです。つまり、極めて単純に、湘南は山の文化の地なんです。自然豊かな地域で、野や山には多くの草花が育ち、この地で取れる薬草などが丸薬として、地産品で作られてきたそうで、その湘南出身の末裔として、小田原の外郎さんの生計を支えてきたのが、湘南の地をベースに伝統的な医薬を作ってきた地域伝承のノウハウだったわけです。湘南ナンバーのエリアが確定した時、箱根までが含まれていて、当時、浅学菲才の輩が、なんで箱根までが湘南なんだと、言いましたが、実は箱根こそ湘南だったわけですね。これは、実際湘南を訪れ、様々に地域の特性を検証した結果が、そういう結論だったのです。

海辺の地の鳴立庵に立つ石碑に湘南の文字があり、その石碑には、清絶なる湘南の地によく似ている、と刻まれているのですから、じゃあきつとそうだろうということで、白砂青松の海を見て、湘南に似ている景色はこれに違いないと、海を見つめてしまった。ま、当たり前ですが、十分な知識も経験もないまま、勘違いして、その認識が広まったんですね。以来、日本の、この地における湘南のイメージは、海の文化として認識されてゆきます。したがって、今回の神奈川県認識も、海への誤解から解け切れていないんですね。ま、これが日本の湘南です、というのなら、それはそれでいいのですが。ただ、県と言う公共体が、オーソライズするには、あまりにも基本認識が甘すぎますね。

私は、湘南は誰のものでもない、と思っています。日本人の幻想の上での地名ですから、これは正しいとか、正しくないとかの論層ではなく、ある種の夢をみんなで共有しているんですから、それをとやかく言うものではない、と思うんですね。正直、そんな規定は必要ない、と思います。夢をオーソライズしたからって、なにも生み出さないのではないかと。夢は夢で茫漠としてよかつたんじゃないか、と思うんです。

★ブログ「水嶋かずあきの甘辛問答」、2019,02,10,

湘南の由来 3 | ネット情報、湘南プロムナード、湘南の発祥（18に関連記事）

■実在した湘南村：湘南が行政区分を持つ固有の地名として実在したときがありますが、神奈川県北部、相模川の溪口部、現在の津久井湖の城山町で、旧あたりの小倉村と葉山村が合併して明治22年(1889)に湘南村が誕生しています。津久井郡の湘南村は昭和30年(1955)に川尻村や三沢村の一部と合併して城山町になりましたので現在は存在しませんが、明治39年(1906)にできた湘南小学校は現存しています。この湘南村が、現在注目されますのは湘南村が出来たのが明治22年(1889)だと言う事です。これは徳富蘆花が「湘南雑筆」を書いた時期より10年も前のこととなります。「湘南」を海と結び付けたのは若しかすると徳富蘆花ではないだろうか、とくに湘南の地名を意識して使用したのではあるまいが、「湘南雑筆」が、湘南の風光の美しさを全国に知らしめるとともに、1898(明治31)年から1900(明治33)年にかけて蘆花が湘南を使用したことで、湘南の地域呼称も全国的な知名度を獲得するにいたったのである。

□徳富蘆花の「湘南雑筆」、「湘南の誕生」より：『蘆花は、1897(明治30)年1月に東京赤坂から逗子の柳屋に転居、「湘南雑筆」の基となる原稿の執筆を始め、12月まで執筆した。翌98年元旦に『国民新聞』に「湘南歳余」を掲載したのを初めとして、「写生帖」の題で連載し、自然詩人の名声を得るようになり、1900年8月に「湘南雑筆」を含む『自然と人生』を出

	<p>版したのである。「湘南雑筆」に描かれた湘南は、逗子ないし逗子から見た相模湾や富士・箱根・伊豆の山々であるが、そこで描写された湘南の景観は、けって南画趣味の風景ではなかった。ヨーロッパ的な視点から試みた自然のスケッチであった。『自然と人生』は、1900年8月の初版発行から11月には3版を重ね、当時としては爆発的なベストセラーになった。1928年5月には実に373版に達し、50万部を突破したという。このヒットが蘆花を専門的文筆家へ踏み切らせることになったのである。その意味からいえば、湘南の海を新しく社会に認めさせた蘆花の方が、影響力という点でははるかに大きかったのである。ヨーロッパの視点で、湘南の自然の美しさをまったく新しく描き出してみせたこの作品は、それまでの風光明媚という伝統的な風景感を打ち破り、湘南の美を西洋的な視点から決定的にイメージづけた非常に重要な作品であった。そしてそれは、葉山から国府津あたりにかけての相模湾沿いの地域を湘南と称することを全国的に印象づける契機となったという点でも非常に重要であったのである。蘆花は、とくに湘南の地名を意識して使用したのではあるまいが、「湘南雑筆」が湘南の美しさを全国に知らしめるとともに、1898(明治31)年から1900年にかけて蘆花が湘南を使用したことで、湘南の地域呼称も全国的な知名度を獲得するにいたったのである。』</p> <p>では湘南という言葉が何時頃から、ほぼ現在の地域を指すものとして使用されるようになったのだろうか。この点を明らかにした文献が今まであまりないのは、特定が困難であるためであるが、社会的に定着したことを示す資料としては、マスコミによる「湘南」という名前を使用して地域呼称していることがわかりますが、湘南の名前を世間に知らしめさせたのは徳富蘆花の大きな功績?だったのではないのでしょうか。</p> <p>★Net情報:「湘南プロムナード」エムワイスター、http://m-y-star.com,http://m-y-star.net、最終更新日2020:06:01「湘南の発祥」</p>
<p>湘南の由来 32 「日本の私鉄・京浜急行電鉄」広岡友紀</p>	<p>■私は東京で生まれ育ったが小学校は鎌倉に通い、十代の頃には葉山を遊びの拠点にしていたので湘南通のつもりでいた。私の思う「湘南」は葉山から大磯にかけての一角である。ある雑誌が「湘南」とは鎌倉由比ガ浜駐車場から平塚までを指すと書き、これには多少違和感を覚えたが、間違いだとは思わなかった。葉山や逗子が含まれていない点が納得できないのだが、ところが私の、そしておそらく大半の人々の常識を根底から覆す話を聞いたのである。平成20(2008)年のことであった。この年は横浜開港150周年の前年だが、そのイベントとして私は横浜市での講演を依頼された。そのイベントプロデューサーである米山淳一氏から教えていただいたことだが、<u>実は「湘南」というのは横須賀がその中心であり、金沢八景に名づけた名称から来ている</u>。湘南の語源は中国の洞庭湖の南から来ているが、確かに金沢八景の眺めはそれに似ているのだろう。私は中国に行ったことがなく想像するしかないのだが、金沢八景の眺めは湘南海岸のそれよりも、はるかに中国的である。本家「湘南」は実は今の京急沿線ということになる。全く私は初耳でありおどろいた。湘南電気鉄道の由来を納得できた。湘南ブランドを西海岸に奪われた様子である。藤沢あたりを本来は「西湘」というらしい。こうした話をご教示いただき京急を「湘南のスプリンター」と記したのである。三浦丘陵の裾をいくつものトンネルで抜き、そこを疾走する京急は、京浜間と全く異なるイメージだ。今も、その車窓風景に湘南電気鉄道の残影を感じることができる。</p> <p>★「日本の私鉄 京浜急行」広岡友紀、毎日新聞社、2010、p172-173</p>
<p>湘南の由来 33 「京急ダイヤ100年史1899~1999」吉本尚</p>	<p>■京浜電気鉄道は湘南電気鉄道と言う子会社を通して三浦半島への進出を計る。ところで、巷には“湘南論争”と言うものがある。「湘南とはどこのことだ」という議論だ。自動車の湘南ナンバー新設は大湘南フィーバーを巻き起こした。だが、そのナンバーの区域に秦野などの山沿いの地帯が含まれ、逆に葉山などが区域外となることに決まって湘南ナンバー熱は一気にしぼんでしまった。ことほど左様に湘南という場所がどこを指すかについては関心が強い。三浦半島を含めるかどうかでも多少議論の分かれるところだが、戦前はその一角を漠然と湘南と呼んでいたようだ。だから三浦半島を営業区域とする新鉄道に何のためらいもなく湘南の名を冠したのだろう。だが、かつては「湘南」の名は必ずしも“カッコいい”響きを感じさせるものではなかったのも確かだ。事実、湘南電車といえば何か田舎臭い印象が残ったし、そのためかもしれないが、京急は戦後、その“湘南ブランド”を惜しげもなく捨て去り、旧湘南電鉄の駅前冠称の「湘南」を、煙突の煙のイメージのつきまとう「京浜」に変えてしまった。(後に「京急」に再変更)だが今では「湘南」のネームは奪い合いの様相で、横須賀を地盤とした企業の中にも、放送</p>

	局、学校、金融機関など、湘南の名を冠するものは数多い。不動産業者は、「京急××駅から徒歩〇分の湘南××分譲地」などと広告している。 ★「京急ダイヤ100年史 1899～1999」吉本尚、株式会社電気社研究会、1999年、p25
湘南の由来 34 「楠山永雄コレクションの葛飾北斎画『金沢八景』」 梅沢恵	■鎌倉時代後期には、元僧・大休正念(1215～89)の法嗣で聖福寺に住した鉄庵道生(1262～1331)が「博多八景」の詩を残すなど、日本の景勝地を中国の「瀟湘八景」に擬える趣向も受容されていた。「瀟湘八景」とは湖南省の洞庭湖に注ぐ二川とその周辺の水辺の景勝(瀟湘夜雨・洞庭秋月・漁村夕照・江天暮雪・遠裏帰帆・山市静嵐・平沙落雁・煙寺晚鐘)をいう。しかし、日本で「近江八景」など、景勝地を「八景」と称することが本格化するのは、江戸時代になってからのことである。そして、本家の「瀟湘八景」は特定のランドマークを表すものではないが、江戸時代の「八景」は特定の地名を冠して受容された。 三浦浄心「名所和歌物語」(1614年刊)に、瀟湘八景と金沢・六浦の景勝を関連付ける記述があるため、この頃までには金沢・六浦に「八景」という枠組みが導入されていたとみられる。そして、それまで名称にゆらぎがあった「金沢八景」を確立したのは、明僧・東臯心越(1639～95)の能見堂八景詩である。東臯は、能見堂を訪れ、その絶景を「瀟湘八景」に擬えて八つの景勝(小泉夜雨・瀬戸秋月・野島夕照・内川暮雪・乙鱗帰帆・洲崎晴嵐・平瀉落雁・称名晚鐘)を詠んだという。 中国の八景詩は「能見堂八景」と題されて刊行され、能見堂でも詩を一枚摺りにして土産物として売っていたらしい。「能見堂八景」は次第に「金沢八景」と称されるようになって定着し、能見堂や金龍院で様々な構図で一覧図、多色摺りの錦絵などが刊行された。 ★楠山永雄コレクションの葛飾北斎画「金沢八景」梅沢恵 ★出典:特別展「愛された金沢八景—楠山永雄コレクションの全貌」編集・発行、神奈川県立金沢文庫、平成29年(2017)、
湘南の由来 35 「六浦・金沢～海が育んだ歴史と文化～」 神奈川県立金沢文庫	■こうした金沢の景観を、中国の名勝である瀟湘八景(瀟湘夜雨・洞庭秋月・漁村夕照・江天暮雪・遠裏帰帆・山市静嵐・平沙落雁・煙寺晚鐘)に擬す試みは、慶長19年(1614)に刊行された三浦浄心著の『巡礼物語』(『名所和歌物語』)や先述した「金沢之絵図」など、江戸時代のはじめごろより行われていた。 こうした瀟湘八景に範をとる景観の選定は、武家・公家・僧侶などが居住する都市京都の近接地である近江百景(琵琶湖とその周辺に存在した唐崎夜雨・石山秋月・瀬田夕照・比良暮雪・矢橋帰帆・粟津晴嵐・堅田落雁・三井晚鐘という八つの景観)においても行われており、一種の流行であったのかもしれない。しかし、金沢八景について見ると、17世紀に至るまでは、地名の比定などについて必ずしも固定化されてはいなかった。 現在よく知られている洲崎晴嵐・瀬戸秋月・小泉夜雨・乙鱗帰帆・称名晚鐘・平瀉落雁・野島夕照・内川暮雪という金沢八景の位置や名称が固定するのは元禄7年(1694)に明の僧東臯心越が能見堂より金沢八景の風景をのぞみ、瀟湘八景になぞらえて八編の詩を詠んだことによる。 ★創立70周年記念特別展「六浦・金沢～海が育んだ歴史と文化～」編集・発行:神奈川県立金沢文庫、発行:平成12年、p161
湘南の由来 36 「ふるさと横須賀(下)」 石井昭	■各種学校だった軍港裁縫女学院は、昭和10年3月に、3年制の実業学校に昇格した。そして翌11年3月、校名が、湘南女学校と改称された。 この時、初めて「湘南」という名称を校名に用いた。「湘南」とは一。 中国に湘水(湘河)という河の南の地方が、気候温暖、風光明媚な名所。三浦半島の気候や自然が、その地方に似ているので「湘南」の名称をつけた、そうなる。 ★「ふるさと横須賀(下)」—幕末から戦後まで—、石井昭、制作発売:かなしん出版、発行:神奈川新聞社、昭和62年
湘南の由来 37	■金沢八景駅の周辺の地域はかつて、入江や内海に干潟と砂州が連なる風光明媚な地として人々にとても親しまれていた。「金沢八景」と呼ばれ、それは中国湖南省にある景勝地、瀟湘

<p>「地図で読み解く京急沿線」岡田直</p>	<p>八景にならい、全国に広まったものだという。</p> <p>八景とは、もともと流動的だったが、江戸時代の禅僧・心越が詠んだ漢詩をきっかけに、「小泉夜雨」「平瀉落雁」「内川暮雪」「乙鱗帰帆」「野島夕照」「称名晚鐘」「洲崎晴嵐」「瀬戸秋月」に定着した。のち歌川広重の錦絵や斎藤月岑(げっしん)の「江戸名所図会」に描かれ、有名になった。</p> <p>★「地図で読み解く京急沿線」、岡田直監修、(株)三オブックス、2019</p>
<p>湘南の由来 38 「京浜急行100年史」京浜急行電鉄(株)</p>	<p>■湘南の地名の由来 一般的には、相模国(神奈川県)の旧国名)南部の意味を持つ。本来、湘南は中国の湖南(フナナン)省南部の洞庭(トンチン)湖の南岸一帯の景勝地で、これを相模湾に沿った地域をなぞらえて、湘南と呼ぶようになった。その命名に大きな役割を果たしたのが、逗子に住んだ文豪・徳富蘆花で、随筆集「自然と人生」のなかで描いてから、湘南が一般化した。</p> <p>★「京浜急行百年史」編集・発行:京浜急行電鉄(株)、制作:(株)京急アドエンタープライズ、1999</p>
<p>湘南の由来 39 「季刊湘南文学」湘南風土記稿・相模川、</p>	<p>■湘南の原風景:津久井湖からほごない、相模川八景のひとつに数えられる城山町・小倉橋へのルートを地図に探す。すると、橋のそばに湘南寺という文字が目についた。なぜここに湘南? たちまち疑問が沸き起り、早速向かうことにした。訪ねてみる、と清楚なたたずまいの寺である。ご住職の山田文央師は突然の来訪者の不躰な質問にもかかわらず、いろいろと親切におしえてくれた。「近隣の村が合併して城山町となるまで、ここは湘南村という村名でした。当時の縁起についてはこちらをご覧ください」縁起によれば、創建時は東光寺と称していたが、その後幾度かの合併を経、1950年、村名をとって湘南寺になったとある。それにしてもなぜ、この地に湘南という名が付くことになったのか。</p> <p>「湘南という地名はもともとは中国の洞庭湖周辺の景勝地にちなみます。山があり川が流れるこの辺りも、景勝地とみなされたのでしょう。そのようなことから湘南という名で呼ばれたのではないのでしょうか」</p> <p>★「季刊湘南文学」湘南風土記稿・相模川、1994年夏号、編集発行人:伊藤玄二郎、かまくら春秋社、1994,7,14</p>
<p>湘南の由来40</p>	<p>■座談会「湘南再考」:</p> <p>■門脇稔 『それではさて、いったい「湘南とは」という点について皆様にご意見をいただきたいと思います。』</p> <p>■團伊玖磨 『「中国湖南省の風光明媚な地帯として知られた瀟水や湘江のある地方の総称」と作家野田宇太郎は瀟湘湖南を説明しているとのことですが、もう少しつけ加えますと、瀟水や湘江という二つの河が北流して中国第2の湖、洞庭湖に注いでいるのですが、その山河のつくりと自然の風光が大変素晴らしいもので、瀟湘湖南と呼ばれ愛されて来ました。日本にも近江八景、金沢八景等ありますが、やはり瀟湘湖南の影響を受けてネーミングされたのですね。ですから「湘南」という言葉が生まれた背景には、「瀟湘湖南」のことを知っていた文人が相模の「相」という文字に「さんずい」のつく偶然を楽しんでつくり出した言葉かと考えています。その時代がいつで、文人とはだれかについては知りません。明治時代には「湘南」という言葉が使われていたのは事実ですが。』(略)</p> <p>■團伊玖磨 『実は彼の地が現実にはどのような自然環境の下にあるのかをこの目で確かめたくて現地を歩いたことがあります。そこで思ったのは、まず風景も地形も、この神奈川・湘南とは全く異なっているということですね。たとえば相模川は南に流れますが、瀟水、湘江は北流しています。また、瀟湘八景や岳陽楼前面の君山など景勝に恵まれた洞庭湖に当たる湖はわが湘南には見当たりません。ですから、湘南というネーミングであっても決して中国の瀟湘湖南にこだわることなく、われわれはわれわれの考えで湘南をとらえたらよいのではないのでしょうか。そこで私の考える湘南の範囲といったものですが、狭義には、大磯、茅ヶ崎、辻堂、藤沢、片瀬を中心とし、広義には相模湾岸の南に面した一帯、ちょうど、一昨年サーフ90でその対象となっ</p>

	<p>た真鶴から三浦までと思います。』</p> <p>★「湘南文學」第3号、発行：学校法人神奈川歯科大学・湘南短期大学、かまくら春秋社、平成4年、p90,93</p>
湘南の由来 41	
湘南の由来 42	
湘南の由来 43	
湘南の由来 44	
湘南の由来 45	